

# 人物の分岐と持続の理論

法野谷俊哉

## 1. はじめに

ある時点にいる人と別の時点にいる人が同一人物であるとはどういうことなのか。この問いに心理的連続の観点から答えるのが心理説である。心理説は、人物同一性をめぐる哲学的研究の焦点の一つである人物の分岐に対処すべく、分岐除外説と多重占有説という二つの形態を備えるに至った。分岐除外的心理説と多重占有的心理説の間の優劣に関しては現在でも議論が継続中である。

他方、対象が時間を通じて存在し続けることは「対象の持続(persistence)」と呼ばれる。人物は持続するし、野良猫、クルマ、地球も持続する。人物の持続を含んだ対象の持続一般に関しては四次元説と三次元説という二つの対立する枠組が存在する。

この論文では、持続に関する枠組の選択が、分岐除外的心理説と多重占有的心理説という二つの形態の心理説にたいして持つ含意を見積もる。そのために、以下では、持続に関する二つの見解(四次元説と三次元説)と心理説の二つの形態(分岐除外説と多重占有説)から得られる、四つの組み合わせのそれぞれを検討する。

持続に関する枠組の選択は、心理説のみならず脳説にも影響を与える。脳説は、人物同一性を脳の保持の観点から分析する立場である。脳説を採りつつ人物の分岐を扱うためには、脳説もまた分岐除外の脳説ないしは多重占有

的脳説という形態を採らなければならない。そして、持続に関する枠組の選択は、二つの形態の脳説にも同様の影響を与える。

このように、持続に関する形而上学的枠組の選択が、心理説にたいしても脳説にたいしても同型の含意を持つと論じることがこの論文の目的である〔1〕。

## 2. 心理説

この論文では、持続に関する枠組の選択が心理説に与える影響に紙幅を割き、脳説については副次的に論じるところにする。まず、この節では心理説の骨子を説明する。

人物の通時的同一性が語られる典型的な場面はどのようなものか。例えば、私が昨日キャンパス内で或る教授を見かけ、そして今晚、書店の人文書のコーナーでその教授らしき人を見かけたとする。このとき、「昨日キャンパス内で見かけたあの人と、今晚書店で一瞬目に入ってきたあの人は同一人物なのだろうか」という問いが浮かぶことは十分にありうる。このとき、二つの時点（この例で言うと、昨日の或る時点と今晚の或る時点）と、それぞれの時点において存在していた人物に焦点が当たる。それぞれの時点において存在していた人物が一体いつから存在し始めたのかよく分からないが、少なくとも、一方の人は昨日のキャンパスに存在し他方の人は今晚の書店に存在していたことは確かである。このように、人物の通時的同一性が語られる典型的な場面では、二つの時点が取り出され、少なくとも一方の時点において存在する或る人物と、少なくとも他方の時点において存在する或る人物が話題となる。

心理説は、人物の通時的同一性を心理的連続の概念を使って分析する立場である。心理説の基本的な主張を「心

理説単純版」と呼ぶことにする。

【心理説単純版】

(少なくとも時点 $t_i$ に存在する人物を $P_i$ 、少なくとも時点 $t_j$ に存在する人物を $P_j$ とし、時点 $t_i$ は時点 $t_j$ に先立つとする。)

$P_i$ と $P_j$ が同一である iff  $t_i$ での $P_i$ にたいして $t_j$ での $P_j$ が心理的に連続している。

心理説では心理的連続が中心概念である。では、心理的連続とはどのような事柄なのだろうか。人物は、通常、さまざまな心理的要素を保持しながら時間を通じて存在し続ける。そうした心理的要素としては、エピソード記憶、意図・計画、嗜好・信条、性格、知識、技能などが挙げられる。例えば、昨日の私と今日の私の間では、こうした心理的要素がほとんど保持されている。しかし、これは偶然ではない。昨日の私が或る一群の心理的要素を持っていたことと、今日の私がその心理的要素のほとんどを持つていたこととの間には因果関係が成立している。つまり、昨日の私が或る一群の心理的要素を持っていたことが原因で、今日の私がその心理的要素のほとんどを持つという結果が生じたと言える。そこで、心理的連続を以下のように定義する。

【 $t_i$ での $P_i$ にたいして $t_j$ での $P_j$ は心理的に連続している】：

(少なくとも時点 $t_i$ に存在する人物を $P_i$ 、少なくとも時点 $t_j$ に存在する人物を $P_j$ とし、時点 $t_i$ は時点 $t_j$ に先立つとする。)

$P_j$ は $t_j$ において、 $P_i$ が $t_i$ において持つ心理的要素をすべて(ないし、ほとんど)持つ。加えて、 $P_i$ が $t_i$ にお

いてその一群の心理的要素を持つことが原因で、 $P_j$ が $t_j$ においてその一群の心理的要素（のほとんど）を持つことが生じた（2）。

（人物の間での心理的連続を語る時、この論文では「 $t_i$ での $P_i$ 」といった表現を用いる。この言葉遣いは冗長に見えるかもしれない。しかし、人が持つ心理的要素は時間によって変化する。したがって、単に「 $P_i$ にたいして $P_j$ は心理的に連続するのか」と問うても意味がない。時点による限定を導入し、「 $t_x$ での $P_i$ にたいして $t_y$ での $P_j$ は心理的連続するのか」といった仕方で行わなければならない。）

### 3. 人物の分岐、分岐除外的心理説、多重占有的心理説

人物同一性をめぐる哲学的研究の焦点の一つが人物の分岐である。以下に人物の分岐の一例を挙げる。この論文ではこの事例に即しながら論を進める。

#### 【脳情報移転装置の事例】

脳内の神経細胞の配置を記録し、その記録に基づいて別の脳にその配置を再現する装置が開発されたとする。ただし、神経細胞の配置の記録は元の脳を破壊しながら行なわれ、記録が終了した時点で元の脳は完全に破壊されてしまう。

作業室の中央に位置したベッドにエリカが寝ている。時点 $t_0$ から作業がスタートし、まず、エリカの脳内の神経細胞の配置がこの装置によって記録された。そして、あらかじめエリカの身体の複製が二つ作られて

おり、それぞれの身体の中に位置する脳にエリカカの神経細胞の配置が再現された。一連の作業は時点 $t_4$ に終了し、作業後少したった現在(II $t_5$ )、エリカカの外観を持つ二人の人が二つのベッドで眠っている。左側のベッドに寝ている人を「エリカL」、右側のベッドに寝ている人を「エリカR」と呼ぶ。

エリカが持っていた、エピソード記憶、意図・計画、嗜好・信条、性格、知識、技能といった心理的側面は、エリカカの神経細胞の配置として脳内に存在している。エリカカの脳もエリカLの脳も同じ神経細胞の配置を持つので、作業直前のエリカと作業直後のエリカLの間で心理的要素はすべて保持されている。また、両者の心理的要素の一致は偶然ではなく、因果関係によって裏打ちされている。したがって、作業直前のエリカにたいして作業直後のエリカLは心理的に連続している。同様に、作業直前のエリカにたいして作業直後のエリカRも心理的に連続している。

この事例に心理説の核心部分である心理説単純版を適用すると、受け入れ難い帰結が生じるように思われる。

【心理説単純版】

(少なくとも時点 $t_1$ に存在する人物を $P_1$ 、少なくとも時点 $t_2$ に存在する人物を $P_2$ とし、時点 $t_1$ は時点 $t_2$ に先立つとする。)

$P_1$ と $P_2$ が同一である iff  $t_1$ での $P_1$ にたいして $t_2$ での $P_2$ が心理的に連続している。

作業直前(II $t_3$ )でのエリカにたいして、作業直後(II $t_4$ )でのエリカLも $t_4$ でのエリカRも心理的に連続しているので、心理説単純版から、「エリカとエリカLは同一である」、「エリカとエリカRは同一である」という命題

が得られる。この二つの命題からは「エリカLとエリカRは同一である」が帰結する。しかし、作業後のエリカLとエリカRは別々の人生を歩み出した異なる人物であるので、この命題は偽である。したがって、この命題が帰結しないよう手を打たなければならぬ。

心理説単純版に条件を付加することで、心理説の洞察を生かしつつこの難点を回避するのが分岐除外的心理説である(例えば、Shoemaker 1970、Shoemaker 1984、Parfit 1984、Garrett 1988)。

### 【分岐除外的心理説】

(少なくとも時点 $t_i$ に存在する人物を $P_i$ 、少なくとも時点 $t_j$ に存在する人物を $P_j$ とし、時点 $t_i$ は時点 $t_j$ に先立つとする。)

$P_i$ と $P_j$ が同一である iff  $t_i$ での $P_i$ にたいして $t_j$ での $P_j$ は、心理的に連続しており、かつ、 $t_i$ での $P_i$ にたいして心理的に連続する人が $t_i$ から $t_j$ の間で同時に複数存在していない。(下線部を「分岐除外条件」と呼ぶ。)

脳情報移転装置の事例に分岐除外的心理説を適用してみよう。 $t_3$ でのエリカと $t_4$ でのエリカLに注目する。両者は心理的に連続している。しかし、 $t_3$ でのエリカと心理的に連続しているのは $t_4$ でのエリカLだけでなく $t_4$ でのエリカRもそうであり、複数存在している。したがって、エリカLは分岐除外条件を満たさないので、エリカとエリカLは同一人物ではない。同じことはエリカRについても成り立つので、エリカとエリカRも同一人物ではない。したがって、分岐除外的心理説によると、作業の過程でエリカが消滅すると同時に、エリカとは異なる、エリカLとエリカRという二人の人物が生成したことになる。この帰結は奇妙かもしれないが、「エリカLとエリカRは同一である」という偽なる命題が帰結することはない。

さて、多重占有的心理説の方は人物の分岐にどう対処するのだろうか。分岐除外的心理説には、分岐の前にはエリカの身体が占める空間領域に一人の人物しかいない（つまり、エリカしかいない）という前提があった。多重占有的心理説は、この前提を捨てることで、心理説単純版をそのままの形で維持しつつ人物の分岐を処理しようとする（例えば、Lewis 1976、Noonan 1989、Noonan 2003）。したがって、多重占有的心理説による人物同一性の分析は、心理説単純版そのままである。

【多重占有的心理説】

（少なくとも時点 $t_1$ に存在する人物を $P_1$ 、少なくとも時点 $t_2$ に存在する人物を $P_2$ とし、時点 $t_1$ は時点 $t_2$ に先立つとする。）

$P_1$ と $P_2$ が同一である iff  $t_1$ での $P_1$ にたいして $t_2$ での $P_2$ が心理的に連続している。

多重占有的心理説は、分岐除外的心理説が採っていた前提、つまり、分岐の前にはエリカの身体が占める空間領域に一人の人物しかいないという前提を捨てる。そして、エリカLとエリカRはエリカの外観を持つ身体が占める空間領域に分岐以前から既に存在していた、と主張する。したがって、「エリカ」と呼ばれるただ一人の人が存在していたのではなく、エリカLとエリカRという二人の人が存在し、その両方が「エリカ」と呼ばれ続けていたことになる。

こう考えるなら、心理説単純版に手を加えることなく脳情報移転装置の事例を処理することができる。多重占有的心理説を採らずに、分岐の前には一人の人しかいないという前提の下で心理説単純版を脳情報移転装置の事例に適用すると、

$t_3$ でのエリカにたいして $t_4$ でのエリカLが心理的に連続しているので、心理説単純版により、エリカ||エリカL。

$t_3$ でのエリカにたいして $t_4$ でのエリカRが心理的に連続しているので、心理説単純版により、エリカ||エリカR。

という二つの推論を経由して、「エリカLとエリカRは同一である」という偽なる命題が帰結するのであった。しかし、多重占有的心理説によると、分岐以前において「エリカ」という名前で指示される唯一の人物が存在していたわけではないので、「エリカ」という表現が登場する上の推論は成り立たない。行なうべき推論は、

$t_3$ でのエリカLにたいして $t_4$ でのエリカLが心理的に連続しているので、心理説単純版により、エリカL||エリカL。

$t_3$ でのエリカRにたいして $t_4$ でのエリカRが心理的に連続しているので、心理説単純版により、エリカR||エリカR。

である。ここからは、「エリカLとエリカRは同一である」という偽なる命題はもちろん帰結しない。(多重占有的心理説では、 $t_3$ でのエリカLにたいして $t_4$ でのエリカRは心理的に連続していると考えられるのか、そうではないと考



えるのか。この点が気になった読者もいるかもしれないが、この論点は以下の第8節で扱う。

#### 4. 四次元説と三次元説

この節では、対象の持続に関する二つの見解である四次元説 (four-dimensionalism) と三次元説 (three-dimensionalism) を紹介する。四次元説と三次元説は以下の考え方である<sup>(3)</sup>。

##### 【四次元説】：

- ・ 持続する対象には、空間的部分だけでなく時間的部分がある。つまり、持続する対象は空間的な広がりを持つだけでなく、時間的にも広がりを持つ。
- ・ 対象が或る時点において存在するとき、その対象が余すところなくその時点に現われているのではなく、その対象の時間的部分だけがその時点において現われている。(時間的部分は「段階 stage」とも呼ばれる。)
- ・ 持続する対象は、過去から現在に至る四次元延長体であり、各時点における段階が集積したものである<sup>(4)</sup>。

##### 【三次元説】：

- ・ 持続する対象には、空間的部分は存在するが時間的部分は存在しない。つまり、持続する対象は、空間的な広がりを持つだけである。
- ・ 対象が或る時点で存在するとき、その対象が余すところなくその時点において現われている。

四次元説によると、人物は持続するのだから時間的な部分を持つ。では、人物の時間的部分の中で最小のものが存在するのだろうか。「瞬間」という語を時間幅を持たない時間的な点を表わすものとして使うことにして、時間幅を持たない瞬間的な時間的部分は存在するのだろうか。こうした問いは興味深いものであるが、この論文とは無関係である。この論文では、人物の瞬間的な時間的部分が存在するという異論を呼びそうな主張には荷担しない。そこで、「時点 $t_i$ 」といった表現を、心理的要素の変化が生じないほどに十分に短い時間幅を持つ期間を表わすものとし、人物の時間的部分としてはこの短い時間幅を持つ時間的部分だけを扱う。

## 5. 四次元説と十分岐除外的心理説

この節では、四次元説と十分岐除外的心理説の組み合わせに検討を加える。

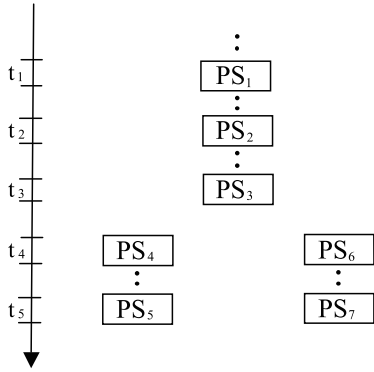
まず、幾つかの概念を導入しておく。四次元説は、人物ではなく人物段階の観点から人物同一性を分析する。中心概念となるのは、人物間の心理的連続ではなく、人物段階間での心理的連続である。

【 $PS_i$ にたいして $PS_j$ は心理的に連続している】

(時点 $t_i$ に存在する人物段階を $PS_i$ 、時点 $t_j$ に存在する人物段階を $PS_j$ とし、時点 $t_i$ は時点 $t_j$ に先立つとする。)

$PS_i$ は、 $PS_j$ が持つ心理的要素をすべて(ないし、ほとんど)持つ。加えて、 $PS_i$ が一群の心理的要素を持つことが原因で、 $PS_j$ がその一群の心理的要素(のほとんど)を持つことが生じた。

ここで疑問を持つ人がいるかもしれない。或る程度の時間に渡って持続しつづける人物はエピソード記憶、意図・



(図1)

計画、嗜好・信条といった心理的要素を持つことができるが、ごく短い時間しか存在し続けられない刹那的な存在者である人物段階は心理的要素を持っていないのではないだろうか。こうした疑問が生じるのは当然である。私の小指は人物である私の部分ではあるが、小指自体は人物ではなく、さまざまな心理的要素を持つ主体とは言えそうもない。同じように、人物段階は人物の部分であってそれ自体は人物ではない。したがって、人物段階のような言わば「人物未満」の存在者が持つことのできる性質に関しては慎重に議論する必要がある。

しかし、少なくともこの論文で扱う範囲であれば、人物段階が心理的要素を持つと主張することは無害である。

(時点  $t_i$  に存在する人物段階を  $PS_i$  とする。)

$PS_i$  が或る心理的要素  $A$  を持つ iff  $PS_i$  を部分とし、かつ、 $t_i$  において心理的要素  $A$  を持つ四次元延長体である人物が少なくとも一人存在する。

この論文では、この式の前半部の意味を後半部が与えることを前提する。つまり、「 $PS_i$  が或る心理的要素  $A$  を持つこと」とは「 $PS_i$  を部分とし、かつ、 $t_i$  において心理的要素  $A$  を持つ四次元延長体である人物が少なくとも一人存在すること」に他ならないと前提する。

人物段階による心理的要素の保持を、脳情報移転装置の事例に即して説明しよう。図1はこの事例を四次元説の観点から図示したものである。

時点  $t_1$  と時点  $t_2$  を作業が開始された  $t_3$  の少し前だとする。 $t_1$  と  $t_2$  と  $t_3$  において中央のベッドに存在する人物段階をそれぞれ、 $PS_1$ 、 $PS_2$ 、 $PS_3$  と

する。作業直後の時点 $t_4$ に左側のベッドに存在する人物段階を $PS_4$ 、同じ $t_4$ に右側のベッドに存在する人物段階を $PS_6$ とする。そして、現在( $t_5$ )に左側のベッドに存在する人物段階を $PS_5$ 、同じ $t_5$ に右側のベッドに存在する人物段階を $PS_7$ とする。

これらの人物段階は、四次元延長体である人物の一部になることなく、それ単独で存在しているわけではない。どの人物段階もそれを部分とする人物がちゃんと存在している。例えば、作業前の中央のベッドにはエリカの外観を持った人が存在し、この人が $PS_1$ から $PS_3$ をその部分としている。作業後の左側のベッドにはエリカの外観を持った人が存在し、この人が $PS_4$ と $PS_5$ をその部分としている。同じように、作業後の右側のベッドにはエリカの外観を持った人が存在し、この人が $PS_6$ と $PS_7$ をその部分としている。

したがって、 $PS_1$ から $PS_7$ のそれぞれの人物段階が心理的要素を持つと主張することができる。例えば、 $PS_3$ に注目しよう。既に確認したように、 $PS_3$ をその部分とする人物が存在する。そしてこの人が「作業終了後、ハワイでのんびりしたい」という計画を $t_3$ において持っていたとする。「 $PS_3$ が或る計画を持つこと」とは「 $PS_3$ を部分とし、かつ、 $t_3$ においてその計画を持つ四次元延長体である人物が少なくとも一人存在すること」に他ならないのだから、この場合、 $PS_3$ は「作業終了後、ハワイでのんびりしたい」という計画を持っていたと語ることができる。 $PS_3$ 以外の人物段階についてもそれを部分とする人物が存在するので、同様のことが成り立つ。

さて、四次元説の下での分岐除外的心理説の紹介に戻ろう。四次元説十分岐除外的心理説は、人物段階の間の心理的連続を中心的概念とする。この概念によって定義される関連概念を幾つか導入する。(下線部が、人物段階に関する分岐除外条件である。第3節で提示した人物に関する分岐除外条件とよく似た型を持つことが分かる。)

【Sは、心理的に連続し、かつ、分岐除外条件を満たす人物段階から成る系列である】…

(時点 $t_i$ に存在する人物段階を $PS_i$ 、時点 $t_j$ に存在する人物段階を $PS_j$ とする。)

異なる人物段階 $PS_i$ と $PS_j$ が $S$ に属する iff

$PS_i$ にたいして $PS_j$ が心理的に連続し、かつ、 $PS_i$ にたいして心理的に連続する人物段階が、 $t_i$ から $t_j$ の間で同時に複数存在していない。

あるいは

$PS_j$ にたいして $PS_i$ が心理的に連続し、かつ、 $PS_j$ にたいして心理的に連続する人物段階が、 $t_j$ から、 $t_i$ の間で同時に複数存在していない。(5)。

【 $S$ は、心理的に連続しかつ分岐除外条件を満たす人物段階から成る極大な系列である】…

$S$ は、心理的に連続し、かつ、分岐除外条件を満たす人物段階から成る系列である。加えて、 $S$ を真部分として含むような、心理的に連続しかつ分岐除外条件を満たす人物段階の系列は存在しない。

四次元説十分岐除外的心理説は、四次元延長体である人物を以下のように定義する。

【四次元説十分岐除外的心理説による人物の定義】…

人物とは、心理的に連続しかつ分岐除外条件を満たす人物段階の系列の中の極大な系列を融合させてできる四次元延長体である。

そして、四次元延長体である人物の同一性は、人物段階の共有という観点から分析される。

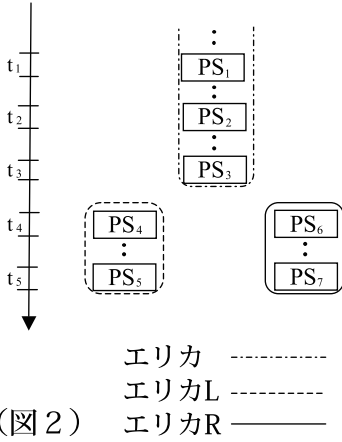
【四次元説十分岐除外的心理説による人物同一性の分析】：

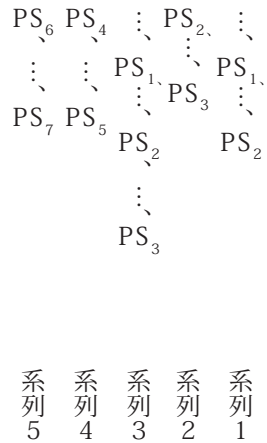
(少なくとも時点 $t_i$ に存在する人物を $P_i$ 、少なくとも時点 $t_j$ に存在する人物を $P_j$ とする。)

$P_i$ と $P_j$ が同一である iff  $P_i$ と $P_j$ が人物段階を完全に共有する。

四次元説十分岐除外的心理説を脳情報移転装置の事例に適用するとどうなるだろうか(図2参照)。 $PS_1$ にたいして $PS_2$ は心理的に連続し、かつ、 $PS_1$ にたいして心理的に連続する人物段階は $t_1$ から $t_2$ まで複数存在しないので、 $PS_1$ にたいして $PS_2$ は分岐除外条件を満たす。同様に、 $PS_2$ にたいして、 $PS_3$ は心理的に連続し、かつ、分岐除外条件を満たす。しかし、 $PS_3$ にたいして $PS_4$ は心理的に連続しているが、 $PS_3$ にたいして心理的に連続する人物段階が $t_4$ において複数

存在するので、 $PS_3$ にたいして $PS_4$ は分岐除外条件を満たさない。同様に、 $PS_3$ にたいして、 $PS_6$ は心理的に連続するが分岐除外条件は満たない。 $PS_4$ と $PS_5$ 、 $PS_6$ と $PS_7$ は、 $PS_1$ と $PS_2$ の場合と同様に、心理的に連続し分岐除外条件も満たす。人物段階の他の組み合わせに関しても、それが心理的に連続しかつ分岐除外条件を満たすのかどうかを判定することができる。以下に、心理的に連続しかつ分岐除外条件を満たす人物段階の系列を幾つか挙げておいた(6)。(ここでは、心理的に連続しかつ分岐除外条件を満たす人物段階から成る系列の内、主なものをだけ列挙した。)





脳情報移転装置の事例には、心理的に連続しかつ分岐除外条件を満たす人物段階の系列が複数登場する。その内、極大な系列は、系列3、系列4、系列5だけである。例えば、系列1は極大な系列ではない。心理的に連続しかつ分岐除外条件を満たす人物段階から成る系列の中に、系列1を真部分として含むもの（例えば、系列3）が存在するからである。したがって、四次元説十分岐除外的心理説によると、系列3、系列4、系列5をそれぞれ融合させることで得られる四次元延長体だけが、この事例に登場する人物である。

では、人物段階から成る系列を融合させるとはどういうことだろうか。例えば、垂直方向一センチの空間的広がりを持つレゴブロック五個を垂直方向に繋ぎ合わせると、垂直方向五センチの空間的な広がりを持つブロックの塊が得られる。同じように、系列3に属するそれぞれの人物段階はごく短い時間的な広がりしか持たないが、これらすべて繋ぎ合わせると出生の時点から $t_3$ までという時間的広がりを持つ人物段階の塊が一つできあがる。これを「エリカ」と呼ぼう。同じように、系列4に属する人物段階を融合させると、作業直後から現在（ $t_5$ ）に至る時間的広がりを持ち、現在は左側のベットに寝ている四次元延長体を得られる。これを「エリカ上」と呼ぶ。そして、系列5からは、作業直後から現在に至る時間的広がりを持ち、現在は右側のベッドにいる四次元延長体を得られる。

これを「エリカR」と呼ぼう。このように、系列3、系列4、系列5を融合させることで、四次元延長体としての人物であるエリカ、エリカL、エリカRが得られる。

次に、エリカ、エリカL、エリカRの間の同一性について述べよう。既に述べたように、四次元説は人物段階の共有の観点から四次元延長体である人物の同一性を考える。図2が示すように、エリカ、エリカL、エリカRは人物段階をまったく共有していないので、四次元説十分岐除外的心理説による人物同一性の分析(14ページ)により、エリカLエリカL $\neq$ エリカR。これは、まさに分岐除外的心理説が提示する描像である。

このように、四次元説の下で分岐除外的心理説を展開することにさしあたり困難が存在しない。

## 6. 四次元説+多重占有的心理説

次に、四次元説の下で多重占有的心理説を展開することにもさしあたり困難が生じないことを示す。四次元説+多重占有的心理説も、四次元説十分岐除外的心理説と同様に、人物段階間での心理的連続の概念を鍵概念として人物の定義を与える。しかし、人物を構成する人物段階の系列に関して袂を分かたず、幾つかの概念を導入する。

【Sは、心理的に連続する人物段階から成る系列である】..

(時点 $t_i$ に存在する人物段階を $PS_i$ 、時点 $t_j$ に存在する人物段階を $PS_j$ とする。)

異なる人物段階 $PS_i$ と $PS_j$ がSに属する iff

$PS_i$ にたいして $PS_j$ が心理的に連続している。



あるいは

$PS_j$ にたいして $PS_i$ が心理的に連続している。

【Sは、心理的に連続する人物段階から成る極大な系列である】..

Sは、心理的に連続する人物段階から成る系列である。加えて、Sを真部分として含むような、心理的に連続する人物段階の系列は存在しない。

四次元説十多重占有的心理説は、人物を以下のように定義する。人物同一性の条件は、四次元説十分岐除外的心理説の場合と同じである。

【四次元説十多重占有的心理説による人物の定義】..

人物とは、心理的に連続する人物段階の系列の中の極大な系列を融合させてできる四次元延長体である。

【四次元説十多重占有的心理説による人物同一性の分析】..

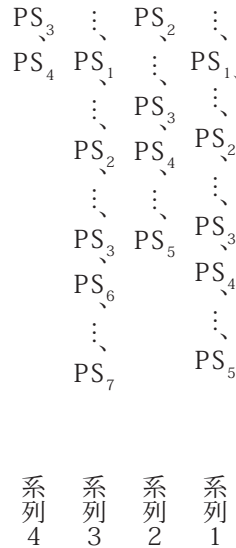
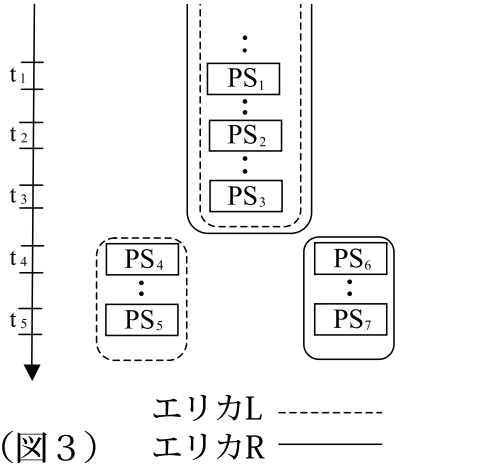
(少なくとも時点 $t_i$ に存在する人物を $P_i$ 、少なくとも時点 $t_j$ に存在する人物を $P_j$ とする。)

$P_i$ と $P_j$ が同一である iff  $P_i$ と $P_j$ が時間的部分を完全に共有する。

人物の定義に至る道筋は、四次元説十分岐除外的心理説の場合も四次元説十多重占有的心理説の場合も似ているが、四次元説十多重占有的心理説は人物を構成する人物段階にたいして分岐除外条件を要求しない。この点が、四次元

説十分岐除外的心理説との違いである。

四次元説十多重占有的心理説を脳情報移転装置の事例に適用してみよう(図3参照)。以下の系列は、この事例に登場する、心理的に連続した人物段階の系列の中の主なものである。



この事例に登場する心理的に連続した人物段階から成る系列の内、極大な系列は系列1と系列3だけである。したがって、四次元説十多重占有的心理説によると、この二つの系列をそれぞれ融合させることで得られる四次元延長体だけが、この事例に登場する人物である。つまり、系列1を融合させると、作業以前から存在し現在(≡t<sub>5</sub>)は左側のベッドに寝ている四次元延長体を得られる。これを「エリカL」と呼ぼう。系列3からは、作業以前から存在し現在は右側のベッドに寝ている四次元延長体を得られる。これを「エリカR」と呼ぼう。

四次元説十分岐除外的心理説と同様に、四次元説十多重占有的心理説も、人物段階の共有という観点から四次元

延長体である人物の同一性を考える。作業以前においては、エリカLとエリカRは人物段階をすべて共有し、空間的に重なり合っている。しかし、 $t_4$ 以降においては人物段階をまったく共有していない。このように、エリカLとエリカRは人物段階を完全に共有しているわけではないので、「エリカL≠エリカR」である。これは、多重占有的心理説が提示する描像に他ならない。

このように、四次元説の下であれば、分岐除外的心理説を展開することにも、多重占有的心理説を展開することにもあからさまな難点は存在しない。

### 7. 三次元説十分岐除外的心理説

この節と次節では、持続に関する枠組を四次元説から三次元説に変えて考える。まず、この節では三次元説の下での分岐除外的心理説を扱う。

三次元説十分岐除外的心理説の場合も、心理的連続の概念が中心概念である。ただし、三次元説を枠組とするので、人物が時間的部分を持つことを前提にしない。したがって、人物段階の間の心理的連続を中心概念とすることはできない。中心概念となるのは、人物と人物の間の心理的連続（より正確に言うと、少なくとも時点 $t_i$ に存在する人物と少なくとも時点 $t_j$ に存在する人物の間の心理的連続）である。

【 $t_i$ での $P_i$ にたいして、 $t_j$ での $P_j$ は心理的に連続している】

（少なくとも時点 $t_i$ に存在する人物を $P_i$ 、少なくとも時点 $t_j$ に存在する人物を $P_j$ とし、時点 $t_i$ は時点 $t_j$ に先立ちとする。）

$P_j$ は $t_j$ において、 $P_i$ が $t_i$ において持つ心理的要素をすべて（ないし、ほとんど）持つ。加えて、 $P_i$ が $t_i$ においてその一群の心理的要素を持つことが原因で、 $P_j$ が $t_j$ においてその一群の心理的要素（のほとんど）を持つことが生じた。

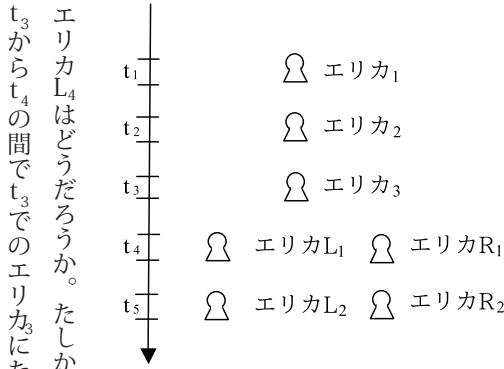
「 $t_i$ での $P_i$ 」や「 $t_j$ での $P_j$ 」という表現に注意を促しておく。この論文では叙述を簡便化するために、三次元説を枠組とする場合でも「 $t_i$ での $P_i$ にたいして、 $t_j$ での $P_j$ は心理的に連続している」という言葉遣いをする。「 $t_i$ での $P_i$ 」は、一見すると、人物 $P_i$ の $t_i$ における時間的部分を指示する表現として読め、それゆえ、人物の時間的部分が存在することに荷担しているように見える。しかし、上の定義の定義項には、「 $P_j$ は $t_j$ において」や「 $P_i$ が $t_i$ において」という表現は登場するが、「 $t_i$ での $P_i$ 」や「 $t_j$ での $P_j$ 」は登場しない。したがって、「 $t_i$ での $P_i$ にたいして、 $t_j$ での $P_j$ は心理的に連続している」という概念は、人物段階に言及しているように見えるが、三次元説の下でも使用可能な概念だけで定義された概念であることが分かる。

三次元説の下での分岐除外的心理説は、この概念を用いて人物同一性を以下のように分析する。

【三次元説十分岐除外的心理説による人物同一性の分析】

（少なくとも時点 $t_i$ に存在する人物を $P_i$ 、少なくとも時点 $t_j$ に存在する人物を $P_j$ とし、時点 $t_i$ は時点 $t_j$ に先立つとする。）

$P_i$ と $P_j$ が同一である iff  $t_i$ での $P_i$ にたいして $t_j$ での $P_j$ は心理的に連続しており、かつ、 $t_i$ での $P_i$ にたいして心理的に連続する人が $t_i$ から $t_j$ の間で同時に複数存在していない。



(図 4)

エリカ<sub>L4</sub>はどうだろうか。たしかに、 $t_3$ でのエリカ<sub>3</sub>にたいして心理的に連続する人が複数存在している。したがって、三次元説十分岐

- 「エリカ<sub>1</sub>」…少なくとも、 $t_1$ に中央のベッドに存在する人
- 「エリカ<sub>2</sub>」…少なくとも、 $t_2$ に中央のベッドに存在する人
- 「エリカ<sub>3</sub>」…少なくとも、 $t_3$ に中央のベッドに存在する人
- 「エリカ<sub>L4</sub>」…少なくとも、 $t_4$ に左側のベッドにいる人
- 「エリカ<sub>R4</sub>」…少なくとも、 $t_4$ に右側のベッドにいる人
- 「エリカ<sub>L5</sub>」…少なくとも、 $t_5$ に左側のベッドにいる人
- 「エリカ<sub>R5</sub>」…少なくとも、 $t_5$ に右側のベッドにいる人

$t_1$ でのエリカ<sub>1</sub>にたいして $t_2$ でのエリカ<sub>2</sub>は心理的に連続しており、 $t_1$ でのエリカ<sub>1</sub>にたいして心理的に連続する人は $t_1$ から $t_2$ の間で複数存在していない。したがって、三次元説十分岐除外的心理説によると、エリカ<sub>1</sub>とエリカ<sub>2</sub>は同一である。同様に、エリカ<sub>2</sub>とエリカ<sub>3</sub>は同一である。では、エリカ<sub>3</sub>と

三次元説の下での分岐除外的心理説とは、第3節で提示したものと内容的に同じである（実は、第3節では三次元説を前提にした語り方をしていた）。  
 三次元説十分岐除外的心理説を脳情報移転装置の事例に適用してみよう（図4参照）。誤解を避けるために、以下のような名前を導入する。

除外的心理説によると、エリカ<sub>3</sub>とエリカL<sub>4</sub>は同一人物ではない。同様に、エリカ<sub>3</sub>とエリカR<sub>4</sub>も同一人物ではない。したがって、三次元説十分岐除外的心理説から以下の帰結が生じる。

エリカ<sub>1</sub> || エリカ<sub>2</sub> || エリカ<sub>3</sub>

エリカ<sub>3</sub> || エリカL<sub>4</sub>

エリカ<sub>3</sub> || エリカR<sub>4</sub>

エリカL<sub>4</sub> || エリカL<sub>5</sub>

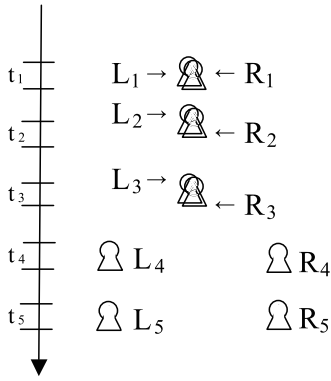
エリカR<sub>4</sub> || エリカR<sub>5</sub>

これはまさに分岐除外的心理説による描像である。このように、三次元説の下で分岐除外的心理説を展開することにはさしあたり難点は存在しない。

## 8. 三次元説十多重占有的心理説

LewisやNoonanがそうであるように、多重占有的心理説は四次元説の下で展開されることが通例である。しかし、三次元説十多重占有的心理説も検討に値する理論的選択肢である。そこで、この節では三次元説十多重占有的心理説という立場を検討する。

三次元説の下で多重占有的心理説を展開する場合でも中心概念となるのは、人物段階の間の心理的連続ではなく人物の間の心理的連続である。この概念を用いて人物同一性は以下のように分析される（これは、第3節で提示し



(図5)

多重占有的心理説は、分岐の前にはエリカの身体が占める空間領域に一人の人物しかいないという前提を捨て、分岐以前に同じ空間領域に二人の人が存在していると主張する。脳情報移転装置の事例の場合で言えば、作業直前の $t_3$ にはエリカLとエリカRが同じ空間領域に重なり合って存在していることになる。そこで、三次元説+多重占有的心理説がこの事例をどのように描写するのかを図5を使いながら説明したい。

まず、図5で使われている、「L<sub>1</sub>」から「L<sub>5</sub>」、「R<sub>1</sub>」から「R<sub>5</sub>」という名前について説明しよう。現在(≡ $t_5$ )に左側のベッドにエリカの外観を持った人が寝ている。そして、 $t_5$ において右側のベッドにエリカの外観を持った人が寝ている。脳情報移転装置が介入するという現実離れた状況なので、それぞれの人がいつの時点から存在していたのかをすぐに判定することはできないが、それぞれが $t_5$ に存在することは確かである。そこで、以下の指示対象を持つものとして「L<sub>5</sub>」と「R<sub>5</sub>」という名前を使うことにする。

た多重占有的心理説と同じものである)。

【三次元説+多重占有的心理説による人物同一性の分析】

(少なくとも時点 $t_i$ に存在する人物を $P_i$ 、少なくとも時点 $t_j$ に存在する人物を $P_j$ とし、時点 $t_i$ は時点 $t_j$ に先立つとする。)

$P_i$ と $P_j$ が同一である iff  $t_i$ での $P_i$ にたいして $t_j$ での $P_j$ が心理的に連続している。

「L<sub>5</sub>」…少なくとも、t<sub>5</sub>に左側のベッドに存在している人  
「R<sub>5</sub>」…少なくとも、t<sub>5</sub>に右側のベッドに存在している人

同じように、「L<sub>4</sub>」と「R<sub>4</sub>」という名前も同じように導入する。

「L<sub>4</sub>」…少なくとも、t<sub>4</sub>に左側のベッドに存在していた人  
「R<sub>4</sub>」…少なくとも、t<sub>4</sub>に右側のベッドに存在していた人

次は「L<sub>3</sub>」と「R<sub>3</sub>」である。多重占有的心理説によると、作業直前のt<sub>3</sub>において中央のベッドに二人の人が重なり合って存在していたとされる。そこで、以下の指示対象を持つものとして「L<sub>3</sub>」と「R<sub>3</sub>」という名前を使う。

「L<sub>3</sub>」…t<sub>3</sub>に中央のベッドに存在し、かつ、L<sub>4</sub>と同一である人  
「R<sub>3</sub>」…t<sub>3</sub>に中央のベッドに存在し、かつ、R<sub>4</sub>と同一である人

また、多重占有的心理説によると、作業より少し前のt<sub>1</sub>とt<sub>2</sub>においても二人の人が重なり合っていた。そこで、以下のように「L<sub>2</sub>」「R<sub>2</sub>」「L<sub>1</sub>」「R<sub>1</sub>」という名前を導入する。

「L<sub>2</sub>」…t<sub>2</sub>に中央のベッドに存在し、かつ、L<sub>3</sub>と同一である人



「R<sub>2</sub>」… t<sub>2</sub>に中央のベッドに存在し、かつ、R<sub>3</sub>と同一である人  
 「L<sub>1</sub>」… t<sub>1</sub>に中央のベッドに存在し、かつ、L<sub>2</sub>と同一である人  
 「R<sub>1</sub>」… t<sub>1</sub>に中央のベッドに存在し、かつ、R<sub>2</sub>と同一である人

必要な準備が済んだので、三次元説十多重占有的心理説の検討に移る。まず、三次元説十多重占有的心理説が導き出したい帰結を確認しておく。その主なものは以下である。

L<sub>1</sub> || L<sub>2</sub> || L<sub>3</sub> || L<sub>4</sub> || L<sub>5</sub>

R<sub>1</sub> || R<sub>2</sub> || R<sub>3</sub> || R<sub>4</sub> || R<sub>5</sub>

L<sub>1</sub> ≠ R<sub>1</sub>、L<sub>2</sub> ≠ R<sub>2</sub>、L<sub>3</sub> ≠ R<sub>3</sub>、L<sub>4</sub> ≠ R<sub>4</sub>、L<sub>5</sub> ≠ R<sub>5</sub>

したがって、三次元説十多重占有的心理説を採るとしたら、

L<sub>3</sub> || L<sub>4</sub> (1)

L<sub>3</sub> ≠ R<sub>4</sub> (2)

と主張することになる。多重占有的心理説の特徴的な主張である(1)、つまり、人物の分岐の後に存在する人物は分岐以前から存在していたという主張は維持しなければならない。(1)に(2)の否定「L<sub>3</sub> || R<sub>4</sub>」を合わせると、「L<sub>4</sub> || R<sub>4</sub>」という偽なる命題が帰結してしまう。したがって、三次元説十多重占有的心理説を採る場合は、(2)と

主張しなければならない。

したがって、三次元説十多重占有的心理説による人物同一性の分析(23ページ)により、(1)と(2)から以下が帰結する。

$t_3$ での $L_3$ にたいして $t_4$ での $L_4$ は心理的に連続している。(3)

$t_3$ での $L_3$ にたいして $t_4$ での $R_4$ は心理的に連続していない。(4)

そして、(3)と(4)を主張するなら、以下の(5)と(6)を主張しなければならない。

$L_3$ が $t_3$ において一群の心理的要素を持つことが原因で、 $L_4$ が $t_4$ においてその一群の心理的要素(のほとんど)を持つことが生じた。(5)

$L_3$ が $t_3$ において一群の心理的要素を持つことが原因で、 $R_4$ が $t_4$ においてその一群の心理的要素(のほとんど)を持つことが生じたわけではない。(6)

(5)は、人物間の心理的連続の定義(19ページ)により(3)から帰結する。では、(6)の方はどうだろうか。人物間の心理的連続の定義により(4)から、

$R_4$ は $t_4$ において、 $L_3$ が $t_3$ において持つ心理的要素をすべて(ないし、ほとんど)持つわけではない

あるいは

$L_3$ が $t_3$ において一群の心理的要素を持つことが原因で、 $R_4$ が $t_4$ においてその一群の心理的要素（のほとんど）を持つことが生じたわけではない

が帰結する。脳情報移転装置により、 $L_3$ が $t_3$ において持つ心理的要素のすべてを $R_4$ が $t_4$ において持つので、第一選言肢を主張することはできない。したがって、第二選言肢、つまり、(6)を主張せざるをえない。

しかし、(5)と(6)の二つを同時に主張することは不可能である。例えば、 $t_3$ において $L_3$ が「昨日歯医者に行った」という記憶を持っていたとする。多重占有的心理説によれば、作業直前の $t_3$ において $L_3$ と $R_3$ という二人の人がいたとされるが、脳はあくまで数的に一つであり、 $t_3$ において $L_3$ が持っていた「昨日歯医者に行った」という記憶はこの脳内の神経細胞の配置として実現している。脳情報移転装置が読み取るのはこの配置であり、複製された二つの脳内に再現するのもこの配置である。したがって、 $t_3$ において $L_3$ が「昨日歯医者に行った」という記憶を持つならば、そのことが原因の一つとなつて、 $t_4$ における $L_4$ も $R_4$ も「昨日歯医者に行った」という記憶を持つに至る。さてここで、 $t_3$ において $L_3$ が持っていた記憶が「昨日歯医者に行った」ではなく「昨日床屋に行った」だった、という反事実的状况について考えよう。このとき、

$L_4$ が $t_4$ において実際に持っていた記憶は「昨日歯医者に行った」であった。だがもし、それに先立つ $t_3$ において $L_3$ が持っていた記憶が「昨日床屋に行った」だったなら、 $L_4$ が $t_4$ において持つ記憶は「昨日床屋に行った」であったはずだ。

$R_4$ が $t_4$ において実際に持っていた記憶は「昨日歯医者に行った」であった。だがもし、それに先立つ $t_3$ において $L_3$ が持っていた記憶が「昨日床屋に行った」だったなら、 $R_4$ が $t_4$ において持つ記憶は「昨日床屋に行った」であったはずだ。

と主張できる。つまり、心理的要素の保持に関して、 $t_3$ での $L_3$ と $t_4$ での $L_4$ は因果関係にあるし、 $t_3$ での $L_3$ と $t_4$ での $R_4$ も因果関係にある。言い方を変えれば、 $t_3$ での $L_3$ が、 $t_4$ での $L_4$ だけに選択的に因果的影響を及ぼすものの、 $t_4$ での $R_4$ には因果的影響を及ぼさない、ということはありえない。したがって、上記の(5)と(6)を同時に主張することは不可能である。

以上から、三次元説の下で多重占有的心理説を展開すると、因果性に関する受け入れ難い主張を行なわざるをえないことが分かる。このように、三次元説十多重占有的心理説はあからさまな難点を抱えている。したがって、三次元説を採用するならば多重占有的心理説を採用することはできない(7)。

これにたいして、四次元説の下で多重占有的心理説を展開する場合には同種の難点が生じないのはなぜであろうか。それは、心理的連続性を与える役割に違いがあるからである。三次元説十多重占有的心理説では、心理的連続性を使って人物同一性が分析される。たいして、四次元説十多重占有的心理説では、心理的連続性ではなく、時間的部分の共有という観点から人物同一性が分析され、心理的連続性は人物を構成する人物段階の系列を指定するために用いられるにすぎない。このような違いがあるために、三次元説を採る場合とは異なって、因果性に関する難点が生じない。

## 9. 脳説と人物の分岐

持続に関する形而上学的枠組の選択は、心理説にたいして持つ含意と同型の含意を脳説にたいしても持つ。脳説は、脳まるごと（ないしは、十分な量の脳）を受け継ぐか否かという観点から人物同一性を分析する。脳説を採る論者が人物の分岐とみなす事例の一つを以下に挙げる。（この事例が現代の生理学・解剖学と整合しているのかどうかは、ここでは問わないこととする。）

【大脳半球移植の事例】

エリカは、右半球も左半球も機能的に等価という点で特異な大脳半球を持っている。そして、大脳抜きのエリカの身体の複製が二つ作られた。時点<sub>1</sub>に作業が始まった。作業室の中央のベッドにエリカが寝かされている。二つの身体のそれぞれにエリカの左半球と右半球が移植された。移植手術は時点<sub>2</sub>に終了した。作業終了後から少し経った現在（＝時点<sub>3</sub>）、左側のベッドにいるエリカ<sub>L</sub>も右側のベッドにいるエリカ<sub>R</sub>もまだ眠っている。移植手術は成功したので、どちらも人として十分に活動可能な状態にある。

人物の分岐に関して、脳説は心理説と同種の困難を抱える。脳説を採る論者は大脳半球を受け継ぐことを十分な量の脳を受け継ぐこととみなす。したがって、エリカ<sub>L</sub>もエリカ<sub>R</sub>もエリカの十分な量の脳を受け継いでいるのだから、脳説から、「エリカ<sub>L</sub>エリカ<sub>L</sub>」と「エリカ<sub>R</sub>エリカ<sub>R</sub>」という命題が得られるように思われる。そして、この二つからは「エリカ<sub>L</sub>エリカ<sub>R</sub>」という偽な命題が帰結してしまう。

この困難にたいして、脳説が採りうる方向は心理説の場合と同じである。つまり、分岐除外的脳説<sup>(8)</sup>を採るか多重占有的脳説<sup>(9)</sup>を採るかの二つである。

持続に関する枠組として四次元説を枠組とした場合、中心概念となるのは、脳の保持に関して人物段階の間で成立する関係である。心理説の場合との類比が見て取りやすいように「脳的に連続」という用語を使おう。

【 $PS_i$ にたいして $PS_j$ は脳的に連続している】：

(時点 $t_i$ に存在する人物段階を $PS_i$ 、時点 $t_j$ に存在する人物段階を $PS_j$ とし、時点 $t_i$ は時点 $t_j$ に先立つとする。)

$PS_j$ は、 $PS_i$ が持つ脳のすべて(ないし、十分な量)を受け継ぐ。

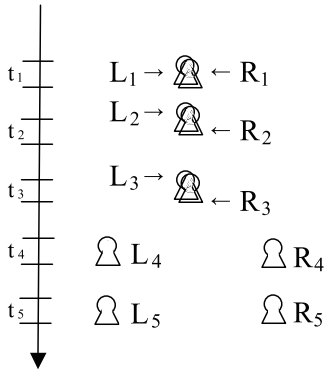
第5節と第6節で展開した議論の中に登場する「心理的な連続」を「脳的な連続」で置き換えるなら、四次元説十  
分岐除外的脳説と四次元説十多重占有的脳説があらゆる難点を持たないことを示す論証が手に入る。(四次元  
説十分岐除外的脳説と四次元説十多重占有的脳説を大脳半球移植の事例に適用した結果をそれぞれ図示すると、図  
2 (14ページ)と図3 (18ページ)になる。)

三次元説を採用した場合、中心概念となるのは、人物段階の間での脳的連続ではなく人物の間での脳的連続であ  
る。

【 $t_i$ での $P_i$ にたいして、 $t_j$ での $P_j$ は脳的に連続している】：

(少なくとも時点 $t_i$ に存在する人物を $P_i$ 、少なくとも時点 $t_j$ に存在する人物を $P_j$ とし、時点 $t_i$ は時点 $t_j$ に先立  
つとする。)

$P_j$ は $t_j$ において、 $P_i$ が $t_i$ において持つ脳のすべて(ないし、十分な量)を受け継ぐ。



(図6)

と主張しなければならぬ。また、多重占有的脳説によると、手術直前の  $t_3$  において  $L_3$  と  $R_3$  という二人の人物が重なり合うように存在していた。二人が占める空間領域はまったく同一であるのだから、右半球と左半球を含んだ脳まるごとが  $L_3$  と  $R_3$  によって共有されていたことになる。移植

$$L_3 \# R_4 \quad (7)$$

三次元説＋多重占有的脳説を採る論者は、

図6のように図示される。

三次元説＋十分岐除外的脳説を大脳半球移植の事例に適用した結果は、三次元説＋十分岐除外的心理説の場合と同様に、

$P_i$  と  $P_j$  が同一である iff  $t_i$  での  $P_i$  にたいして  $t_j$  での  $P_j$  が脳的に連続している。  
とする。）  
(少なくとも時点  $t_i$  に存在する人物を  $P_i$ 、少なくとも時点  $t_j$  に存在する人物  $P_j$  とし、時点  $t_i$  は時点  $t_j$  に先立つとする。)

【三次元説＋多重占有的脳説による人物同一性の分析】

第7節と類比的な議論を行えば、三次元説＋十分岐除外的脳説からさしあたり難点が生じないことが分かる。だとすると、心理説の場合と同様に、脳説の場合も三次元説＋多重占有説という組み合わせはあからさまな難点を持つと予測される。この予測の正しさを以下で示そう。

手術の結果、 $R_4$ は $L_3$ が持つていた脳まるごとから十分な量の脳を受け継いだのだから、

$t_3$ での $L_3$ にたいして $t_4$ での $R_4$ が脳的に連続している (8)

と主張せざるをえない。しかし、三次元説十多重占有的脳説による人物同一性の分析(31ページ)を前提にすると、(7)と(8)という二つの主張を行なうことはできない。

したがって、心理説の場合と同様に、脳説の場合でも、四次元説の下であれば、分岐除外説的脳説を展開することにも多重占有的脳説を展開することにもさしあたり困難は生じない。他方、三次元説を採用の場合、分岐除外的脳説を展開することは可能だが、多重占有的脳説は深刻な難点を抱えることになる。(ちなみに、三次元説十多重占有的脳説とは異なつて、四次元説十多重占有的脳説にはこの難点は生じない。両者の間には脳的連続に与える役割の違いがあるからである。この点でも心理説の場合と同様である。)

## 10・結論

以上の検討から、四次元説と三次元説という持続に関する二つの枠組の間での選択は、心理説と脳説という人物同一性に関する代表的な理論にたいして同型の影響を与えることが分かる。心理説を採ろうと脳説を採ろうと、四次元説の下であれば分岐除外説の形態で理論を展開することも多重占有説の形態で理論を展開することもできる。しかし、三次元説の下では、多重占有説という形態は深刻な困難を招くので分岐除外説という形を採らざるをえない。つまり、心理説であれ脳説であれ、三次元説十多重占有説という組み合わせが困難をもたらす。このように、



持続の枠組に関する選択は、心理説と脳説が採りうる形態の範囲を変える。

## 文献表

- Garrett, Brian (1998), *Personal Identity and Self-Consciousness*, Routledge.
- Haslanger, Sally (2003), "Persistence through Time", in Michael J. Loux&Dean W. Zimmerman (eds.), *The Oxford Handbook of Metaphysics*, Oxford University Press, 2003, pp.315-354.
- Lewis, David (1976), "Survival and Identity", in his *Philosophical Papers*, vol.1, Oxford University Press, 1983, pp.55-72, originally in A. O. Rorty (ed.), *The Identities of Persons*, University of California Press, 1976, pp.17-40.
- Noonan, Harold (1989), *Personal Identity*, 1st ed., Routledge.
- Noonan, Harold (2003), *Personal Identity*, 2nd ed., Routledge.
- Parfit, Derek (1984), *Reasons and Persons*, Clarendon Press.
- Robinson, Denis (1985), "Can Amoebae Divide without Multiplying?", in *Australasian Journal of Philosophy* 63(1985), pp.299-319.
- Shoemaker, Sydney (1970), "Persons and their Pasts", in his *Identity, Cause, and Mind*, Cambridge University Press, 1984, pp.19-48, originally in *American Philosophical Quarterly* 7(1970), pp.269-285.
- Shoemaker, Sydney (1984), "Personal Identity: a materialist's account", in Sydney Shoemaker&Richard Swinburne, *Personal Identity*, Blackwell, 1984, pp.67-132.
- Unger, Peter (1990), *Identity, Consciousness and Value*, Oxford University Press.

(1) 私の現在の研究上の関心は、種々の反論から人物同一性に関する心理説を擁護すること、そして、心理説が還元的であるか否か(つまり、心理説が提示する人物同一性の条件は、人物同一性の概念を前提せずに理解できるのかどうか)を確定することにある。この方向での研究として、法野(谷)俊哉、「人物の同一性と適切な因果過程」(『哲学・科学史論叢』、第十四号、二〇一二年)がある。そこでは、還元的な心理説にとつての障害の一つを除去することを試みた。

さて、形而上学は近年盛んに論じられている研究領域であり、その中の主要な主題の一つに対象の持続がある。この研究状況を鑑みるなら、人物も持続する対象の一事例であるのだから、対象の持続についての形而上学的研究を無視して人物同一性の研究を進めることはできない。そこで、本論文では、還元的な心理説の可能性を論じるための議論の土俵を形而上学の観点から整備する作業を行なう。

(2) 叙述を簡略化するために、心理的連続にたいして少々単純化した定義を与えた。長い時間が経過し心理的要素がほとんど保たれていないが人物同一性は成立するという場合を扱うためには心理的連続の概念をもっと丁寧に定義する必要がある。しかし、この論文ではいともとの間隔が非常に短い場合だけを考察するので、この単純化した定義で十分こと足りる。

(3) 四次元説と三次元説に関しては、Haslanger 2003を参照のこと。ただし、Haslangerは、「四次元説を『Perdurance theory』、三次元説を『Endurance theory』と呼ぶ。

(4) 四次元説に関して幾つかの疑問が生じるかもしれない。四次元延長体である人物と、或る時点におけるその人物の部分(=人物段階)ではどちらが基礎的な存在者であるのか。基礎的存在者である人物段階を融合することで派生的に得られるのが四次元延長体としての人物であると考えられることもできそうだし、あるいは逆に、四次元延長体である人物が基礎的存在者でありその時間的部分として派生的に存在するのが人物段階であると考えられることもできそうである。この論文では、人物と人物段階がどちらが基礎的な存在者であるのか、あるいは、どちらも基礎的な存在者であるのか、といった問いは未決のままにしておくが、これはこの論文での私の主張に影響を与えない。

(5) もっと簡潔な定義を与えることができるのでは、という疑問が生じるかもしれない。この疑問には註6で答える。

(6) 註5で予告しておいたように、「心理的に連続し、かつ、分岐除外条件を満たす人物段階から成る系列」の定義(12ページ)が多少複雑になった理由について述べる。

例えば、 $PS_i$ を $PS_j$ に時間的に先立つものとするれば、以下のように定義を簡潔にすることができる。

【Sは、心理的に連続し、かつ、分岐除外条件を満たす人物段階から成る系列である】…  
(時点 $t_i$ に存在する人物段階を $PS_i$ 、時点 $t_j$ に存在する人物段階を $PS_j$ とし、時点 $t_i$ は時点 $t_j$ に先立つとする。)

異なる人物段階 $PS_i$ と $PS_j$ がSに属するiff

$PS_i$ にたいして $PS_j$ が心理的に連続し、かつ、 $PS_i$ にたいして心理的に連続する人物段階が、 $t_i$ から $t_j$ の間で同時に複数存在していない。

しかし、残念ながら、この定義ではうまくいかない。人物の分岐では、通常、同じ時点に存在する相異なる人物段階が登場する。脳情報移転装置の事例で言えば、図1(11ページ)での $PS_4$ と $PS_5$ 、 $PS_5$ と $PS_6$ がそうである。しかし、この簡略な定義に登場する「 $PS_i$ 」と「 $PS_j$ 」には前者が後者に時間的に先立つという限定がついているので、この定義は、異なる時点に存在する二つの人物段階については何事かを述べているが、同じ時点に存在する二つの人物段階については何も述べていない。

他方、12ページの少々複雑な定義の方は、「 $PS_i$ 」と「 $PS_j$ 」に時間の前後関係に関する限定が加わっていないので、同時点に存在する二つの人物段階についても何事かを述べるものである。例えば、 $PS_4$ と $PS_6$ に注目しよう。脳情報移転装置の事例の設定により、 $PS_4$ と $PS_6$ が持つ心理的要素はすべて一致している。しかし、 $PS_4$ と $PS_6$ の間には因果関係が成立せず、「 $PS_4$ が一群の心理的要素を持つことが原因で、 $PS_6$ がその一群の心理的要素を持つことが生じた」とは主張できない。したがって、人物段階の心理的連続の定義(10ページ)により、「 $PS_4$ にたいして $PS_6$ は心理的に連続している」とは主張できない。同様に、「 $PS_6$ にたいして $PS_4$ は心理的に連続している」と主張することもできない。このように、 $PS_4$ と $PS_6$ の間では心理的連続が成立していない。したがって、12ページ

の定義を参照するなら、心理的に連続し、かつ、分岐除外条件を満たす人物段階から成る系列 $S$ に、 $PS_4$ と $PS_6$ の両方が含まれることが分かる。言い換えると、 $PS_4$ と $PS_6$ の両方を含んだ人物段階の系列は、心理的に連続し、かつ、分岐除外条件を満たす人物段階から成る系列には該当しない。例えば、「 $\dots$ 、 $PS_1$ 、 $\dots$ 、 $PS_2$ 、 $\dots$ 、 $PS_3$ 、 $PS_4$ 、 $PS_6$ 」というY字型の人物段階の系列は、この定義を満たさな $\bar{c}$ 。

このように簡潔な定義には満足できない点があるので、「心理的に連続し、かつ、分岐除外条件を満たす人物段階から成る系列」の定義は少々冗長なものにせざるをえない。

(7) Robinsonは、「Lewisによる論じ方」 $\llcorner$ 多重占有説 $\lrcorner$ から四次元説への関与を切り離す」(Robinson 1985, p.300,  $\square$ 内は筆者。)ことを試みている。ただし、彼が取り上げる事例はアマーバの分裂であり、心理的連続ではなく身体の連続に焦点を当てる。したがって、Robinsonは、多重占有的心理説と三次元説の両立可能性を論じているわけではない。しかし、Robinsonの試みがもし成功するなら、多重占有的心理説を三次元説の下で展開することにたいしても何らかの含意があるはずである。したがって、Robinson論文を無視することはできな $\bar{c}$ 。

Robinsonは、三次元説を採るWigginsの考えの基本的な部分を残しながら、多重占有説との両立を図ろうとする。Robinsonが注目するWigginsの考えは、身体が時間的にも空間的にも連続的に追跡可能であることがアマーバや人物の通時的同一性の規準である、というものである。例えば、数十年ぶりに会う小学校時代の友人と私はレストランで落ち合うことになっているとする。レストランの席にいま座っているあの男を過去に向かつて連続的に追跡してゆくと、まだ小学生だった私の旧友に至るのだとする。これが、私の旧友とあの男が同一人物であることの規準であるとWigginsは考える。対象を連続的に追跡できることは、その対象が時間的部分を持つ四次元延長体であるという考え方を必要としない。したがって、対象の通時的同一性についてのこの考え方は三次元説と両立可能である。

Wigginsのこの考えを生かしつつ、対象の分岐を取り扱えるようにRobinsonはWigginsの考えに微修正を加える。最終的にRobinsonは以下の主張を行な $\bar{c}$ 。(Robinson 1985, 註9)。

(アマーバがアマーバBとアマーバCに分裂したとする。分裂前の時点 $t_1$ にアマーバがいる空間領域を $R_1$ 、分裂後の時点 $t_2$ に

アマーバ B が存在する空間領域を  $R_b$ 、時点  $t_2$  にアマーバ C が存在する空間領域を  $R_c$  とする。)。

$t_2$  において空間領域  $R_b$  にいるアマーバを過去に向かって連続的に追跡すると  $t_1$  において空間領域  $R_a$  にいるアマーバに至るとき、 $t_1$  において空間領域  $R_a$  にいる何らかのアマーバが  $t_2$  において空間領域  $R_b$  にいる何らかのアマーバと同一である。

たしかに、「何らかのアマーバ」という言い方を用いることで、一つの空間領域に複数のアマーバが存在することを許容する主張になっている。しかし、残念ながら、この主張には三次元説十多重占有的心理説と同様の難点が隠れている。多重占有説を採るのだから、 $t_1$  において空間領域  $R_a$  には二匹のアマーバがいることになる。アマーバ B と同一であるものをアマーバ  $A_b$ 、アマーバ C と同一であるものをアマーバ  $A_c$  とする。 $t_2$  において存在するアマーバ B を過去に向かって追跡してゆくと、 $t_1$  において  $R_a$  に存在する  $A_b$  に至る。だが、 $t_1$  において  $R_a$  には  $A_b$  だけでなく  $A_c$  も存在していたのだから、 $A_b$  に至ると同時に  $A_c$  にも至るはずである。連続的追跡可能性によって通時的同一性を捉えるのだから、「 $B \parallel A_c$ 」が得られる。そして他方、「 $A_c \parallel C$ 」なのだから、二つを合わせると「 $B \parallel C$ 」という偽な命題が生じてしまう。

このように、Wiggins の考えをベースとしながら三次元説十多重占有説を展開しようという Robinson の試みは失敗している。

(8) Unger は分岐除外的脳説を提示してやる (Unger 1990, p.109)。また、Parfit 自身は脳説を支持するわけではないが、分岐除外的脳説を取り上げて検討を加えている (Parfit 1984, p.204)。

(9) 多重占有説は心理説の一形態として展開されることが多く、私を知る限り、多重占有的脳説を採用する論者は存在しない。しかし、考慮に値する脳説の一形態である。